

# 視覚障害について

## 視覚障害とは

- メガネやコンタクトレンズをしても一定以上の視力が出ない「**視力障害**」と、見える範囲がだんだん狭くなる「**視野障害**」により、生活に支障がある状態をいいます。
- 視覚障害にも程度があり、「まったく見えない」「見えづらい」の2つに大別されます。
- 「見えづらい」の中には、次のような症状があります。
  - ・細部がわからない
  - ・光がまぶしい
  - ・暗いところで見えづらい
  - ・見える範囲が狭い
  - ・特定の色がわかりにくい



## 言葉の説明

**全盲** … 光をまったく感じない、まったく見えない状況  
**ロービジョン** … めがねなどを使っても十分な視力を得られない状況  
**視野狭窄** … 見える範囲が狭い状況 (中心部が見えづらい「中心暗点」など)

## こんなことに困っています！

- 一人で移動することが困難です。  
慣れていない場所では一人で移動することが困難です。
- 目で見る情報は集めにくいです。  
目で見ることによる情報は得にくいため、音を聞いたり、手で触れるなどにより情報を集めます。墨字による手紙やチラシなどはわかりにくいです。
- 自分のいる場所や、ほかに誰がいるのか周りの状況がわかりません。  
会議などでは、自分が会議室のどこにいて、ほかに誰が出席しているか、説明がないとわかりません。
- ほかの人の視線や表情がわからないことから、コミュニケーションに苦労します。
- 点字アロックスの上に、看板や自転車などがあると、歩くのに困ります。  
視覚障害がある人の中には、点字アロックスを頼りに歩く人がいますが、物が置いてあると、ぶつかるなど、けがをさせていただきます。

## コミュニケーションのポイント

- 視覚障害がある人は、困っていても周りの状況がわからないので、助けを求められないことがあります。「何かお困りですか」などと声をかけましょう。

**ポイント** 声をかけるとき、突然に肩をたたくなどすると驚かせてしまいます。できるだけ前方から、自分の名前を名乗るなど、話しかけましょう。

- 視覚障害がある人に説明するとき、「あれ」「それ」や「あちら」「こちら」などの表現ではわかりません。「あなたの30センチ右」「あなたの2歩前」など具体的に説明しましょう。
- 視覚障害がある人を誘導する場合、どのように誘導すればよいか、本人に確認してから誘導しましょう。

**ポイント** 誘導の受け方は人によって違います。その人の意向を確認し、立つ位置や歩く速度など、本人の望む方法により、誘導することが必要です。

## 望まれる心配りの例

- レストランでは、メニューに書かれている内容(料理名、値段、分量など)を読み上げて説明しましょう。また、料理が運ばれてきたときは、どこに、どの料理があるか説明しましょう。
- トイレに案内するときは、入口までの誘導ではなく、中まで誘導し、個室の場合は「和式か洋式か」「便器の向き」「トイレットペーパーや水洗レバーの位置」などを確認してもらいましょう。
- お店などで商品代金のおつりを渡すときには、紙幣や硬貨の種類を声に出して確認しながら手渡ししましょう。
- 音声案内のない信号機の横断歩道では、信号が「赤」なのか「青」なのかわかりにくいので、「歩行者用の信号が青になりました」「歩行者用の信号はまだ赤です」などと、声をかけましょう。また、できれば誘導して一緒に横断歩道を渡りましょう。
- 駅のホームでは線路への転落の危険があります。また、階段付近も転落の危険があります。あぶないときは声をかけましょう。
- 点字アロックスの上に物を置いたり、自転車を置いたりするのはやめましょう。
- 盲導犬には、視覚障害がある人に交差点や段差、自動車の接近を知らせるなど、安全な歩行を助ける大切な役割があるので、邪魔をしないように温かく見守りましょう。

